

Title	昭和四十二年度夏季見学旅行記
Sub Title	
Author	舟越, 香郎(Funakoshi, Koro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1968
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.4 (1968. 3) ,p.153(713)- 155(715)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19680300-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東洋史専攻

湯川 武 十六世紀インド洋におけるポルトガルとエジプト関

係史

池永 佳昭 諸蕃誌の文献的研究

寺田 鎮子 チベット諸宗派抗争時代における地域性の問題

西洋史専攻

菅原 稠 比較文化——一つの試み——

小川 決子 復興期におけるヨーロッパ統合化とアメリカの対欧

政策

刈込 綾子 ジョン・ヘンリー・ニューマンの国家観の成立

真下 英信 クレールルーキア

今無 畏子 ルイ十三治下のカトリック・ルネサンス——宮廷信

心派の敗退とリシュリュー体制の成立——

昭和四十二年夏季見学旅行記

例年秋に行なわれていたものを本年は夏休み前の七月三日より

七日まで、姫路・加古川・淡路方面に旅行見学した。一行は浅

子・清水・前嶋・近山・志水・鈴木の各先生方と学生、総勢七十

三人の多数であった。

東京出発組は二日夜の「銀河」により、三日午前十時半に姫路

駅に到着、現地集合組と合流、小雨の中をバス二台に分乗して、

まず姫路城に向つた。幸いにも城内見学の際は雨もあがり、薄日

の中に名前の如く美しい天守閣等の建物が我々の眼を楽しませて

くれた。連立式天守閣の複雑な構成はもとより、各曲輪の構成、石垣の美しさはさすがに日本三大名城の一つに数えられるだけあり、更に先頃の解体修理によりよく整備保存されているのにも感心させられた。

城の前の休憩場にて昼食後、進路を東にとり播磨国分寺跡に向つた。寺跡は今は耕地の中に南大門・中門・塔・金堂・講堂の礎石群を残すのみで、それ以外に往昔を伝えるものは何物も残っていない。塔跡の礎石を見ながら、清水先生の説明をうけ、その後、寺跡の北方にある壇場山古墳に向つた。この辺ではかなり大きな全長一四〇米、周溝を持つ前方後円墳で、後円部頂上には長さ三米の長持型石棺が露出していた。次にそのすぐ側の山ノ越古墳を見学した。平地上の一辺五〇米の壮大な方墳で、周溝を持ち、長持型石棺が露出していた。壇場山古墳に続き清水先生の説明を受けた後、我々は本日の予定を終え、姫路市内をバスより眺めながら宿の塩田温泉上山旅館に向つた。夜、一同そろつて浅子先生より明日よりの見学の為め、和様・唐様・天竺様の建物の説明を特に受けた。

七月四日。先ず書写山円教寺に向う。麓よりケーブルで山上まで登り、涼しい山中を大講堂まで歩く。室町期の大講堂・常行堂・食堂の重文建築など、山嶽寺院の典型的配列をよく示しており、大講堂内の釈迦如来坐像及び四天王像は藤原初期の特徴を示すもので、密教の強い雰囲気の中にあつた。また山内には正中三年及び正慶二年の在銘の石仏や、和泉式部の歌塚と伝えられる石

塔もあり、その方面の人々を喜ばせた。

次に姫路を後にして北条の一乗寺に向つた。承安元年在銘覆鉢のある国宝の三重塔は遞減率の大きな調和のとれたものである。

その他重文指定の建築物や、国宝指定の天台高僧画像等の絵画や仏像彫刻数点もあり、なかなか内容のあるものが見られた。寺の前には、元享元年在銘の五輪塔が立ち、円教寺に続いて古く良い石造美術にふれることが出来た。

一乗寺にて昼食後、浄土寺に向う。浄土寺は鎌倉時代に俊乗坊重源が東大寺播磨別所として建立したもので、その浄土堂は我国の天竺様建築の完全なものとして東大寺南大門と共に残る貴重なものである。円柱・円束・円虹梁・挿肘木など異国情緒に富み豪放快奔なもので、特に化粧屋根裏の華かな線がすばらしい。浄土堂内の伝快慶作阿弥陀三尊立像は、指の爪が長く、手の型が通例のものに異り、一種の地方様式とも考えられるが、その荘嚴な姿は堂一杯に広がるばかりの大きさに仰げる。しかし表情は温和で堂とともに極楽浄土の世界を想わせる。その他寺内には薬師堂など見るべきものが多い。夕日に更に朱が美しく映える浄土寺に一同別れをつけて、神戸に向い、宿の須磨荘に入る。

七月五日。神戸市垂水区の五色塚古墳を最初に見学する。舞子浜に接近した台地上の全長二〇〇米の前方後円墳で周濠を一部残している。別名千壺古墳とも云い、書紀の神功皇后の伝承にも登場する古墳で、全面発掘調査が終り、多数の円筒埴輪などの遺物が出土、現在表面の葺石を復元中である。非常に大きな古墳で、

淡路島がすぐ前に見える所に位置する。この西方に小型の小壺古墳と称される円墳があり、その方も見学し、清水先生の説明を受ける。

朝からの雨の中をバスは西に向い、加古川の鶴林寺に着く。鶴林寺は播磨の法隆寺と別称される程隆盛した寺で、重要な美術品も多く残り、なかでも典型的な白鳳期の銅造聖観音立像のにこやかな顔が我々の眼を奪う。太子堂・本堂の国宝を始め堂塔類も多く、特に太子堂は平安貴族の持仏堂を偲ばせる優雅なものであり、本堂は折衷様の代表作で室町期のものである。その他に宝物殿には重文指定の仏像・仏具・絵画・経・古文書が多く陳列され、往時の隆盛を物語ってくれた。

一段と強くなつた雨の中、明石城を車中より眺めながら神戸に戻り、太山寺に到着。本堂は鎌倉後期の和様建築で、地形を巧みに利用して建られ、最近解体修理を終えている。阿弥陀堂本尊の丈六阿弥陀如来像は定朝様式をうかがわせる。その他鎌倉期の釈迦三尊像と室町期の彫刻数体を見学、寺の特別の配慮により平家納経三十二卷、曼陀羅などの絵画、そして大塔宮護良親王令旨及び注進状などの建武中興時の太山寺の動向を示す貴重な古文書などを見せて戴いた。

太山寺を終えて再び神戸に戻り、雨の離宮公園をしばし見物する。

七月六日。須磨荘を出て、フェリーボートで淡路島岩屋港に渡る。まず福良港にバスを進め、遊覧船にて鳴門の渦潮を見物し、

昼食後、淡路人形館にて淡路人形を観賞する。出し物は「傾城阿波鳴門」で、一同しばらくの間この伝統芸術の中に引き込まれる。都会的文楽とは異なり、土臭い感じもするが、そこに古の芸能の本来の姿を見ることが出来たと思う。

次に淡路国分寺に向う。バスより降りしばらく歩いた所に今にも崩れそうな寺があり、それが国分寺であった。今残るものとしては当初のものを模した暦応三年在銘の丈六釈迦如来坐像と塔の礎石のみで、大柄に削り出した心礎の造り具合がよく残存していた。あたりの荒廃した状況といい何んとなく寂しい風景が眼に残った。

バスは西海岸の慶野松原に向い、そこでしばらく休憩する。砂と小石が特に美しい。次に松原から近い慶野組所蔵の銅鐸を見学し、持主の家まで行く。銅鐸は高さ三〇センチ程の弥生時代の比較的早い頃の小型の物であるが表面に動物らしいものが鑄出してあり興味深かった。清水先生より細かい説明を受ける。銅鐸をみた後、バスは洲本に直行し、洲本城の真下にある三熊旅館に到着する。今回の旅行最後の晩とあつて旅行参加者の紹介やら余興を行なう。

七月七日。再びフェリーボートで神戸に戻る。ここからは一応自由コースとなり、雨中の市内見物の組と、中山寺・安倉古墳に向う組のものと別れる。後者のコースは、先ず宝塚市の安倉高塚古墳を見学、地主さんの家にて同古墳出土の赤鳥七年鏡及びその他の出土品を見る。次に中山寺に向い、仏像彫刻と石棺、そし

て横穴式石室の立派な中山寺古墳を見学する。これにて今回の旅行の見学コースは全て終了し、一路三宮駅に向う。

午後二時半、市内コースの組ともども三宮駅にて見学旅行を一応解散する。

今回の旅行に於いては、播磨国の文化財や史跡をまとめた形で見る事が出来たのが何よりの収穫であつたと思う。

終りに旅行中終始いろいろ便宜を計つていただいた旅行社及び現地の方々に紙面を借りて厚く御礼を申し上げたい。

(舟越香郎記)

昭和四十二年度秋季見学旅行記

(甲府方面)

十月二十三日午前八時三十分新宿駅西口に集合し、貸切りバス二台で甲府へ向う。一行は前嶋信次 清水潤三 鈴木泰平 志水正司四先生と史学科学生七十六名 計八十名であつた。

バスは甲州街道を相模湖、笹子峠を通り甲府に入つた。最初の見学地は勝沼町の大善寺。本堂は方五間の檜皮葺で、内部は前二間が外陣、後三間が内陣と分かれており、その境には格子戸と菱欄間が用いられている。両陣とも虹梁上に置かれた組み物は独特の繰り形をつけており、和風を主体とした折衷様式と云えるもので、当地方における鎌倉時代の建築例として注目されている。本尊の薬師如来像は高さ88cmのサクラ材を用いた一木造りである。

次いで甲斐一宮である浅間神社に向う。ここは後奈良天皇(在